

---

# ポーン・ブラザーズ

パンター

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポーン・ブラザーズ

### 【Nコード】

N8147R

### 【作者名】

パンター

### 【あらすじ】

ワケあり品を買い取る道具屋ポーン・ブラザーズで働くおれはフランスとの店番の最中に言いようのない不幸に見舞われる。

帝都屈指の訳あり品買取店で有名なポーン・ブラザーズは、曾祖父の代から帝都大通りの最も城門よりに店を構えている。

大陸中のお宝が眠ると言われている遺跡を回り、帝立文化庁の遺跡調査団との争奪戦をくぐり抜けてお宝を発掘しまくったトレジャーハンターだった曾祖父が帝都で店を始めたのは長男が物心ついた頃だった。

既に中年を迎えて安定した生活を望んでいた彼は、幾つかの重要な古代魔法遺物を帝立文化庁へ提供して和解し、帝都に住居を得た。さらにトレジャーハンターだった経験と人脈から入手できる情報の一部を文化庁に漏洩することで、店を構えることに成功した。それがポーン・ブラザーズである。

おれの一族の姓ポーンにトレジャーハンターをブラザーと呼ぶ訳あり品買取店と言うことでこの店名がつけたいらしい。今では持ち込み客の半分はトレジャーハンターではなく、一般の客だ。商人、旅人、たまに正に訳ありの貴族とかもやって来る。持ち込まれる品も様々だ。偶然手に入れた物から、代々受け継がれた遺品まで色々ある。中には本当に価値有るものから、ヤバい物も持ち込まれる。帝都を危機に陥れそんな古代魔法兵器も過去にあった。どうやって手に入れたんだ？マジで？

そういう危険な物は文化庁に通報。即刻回収してもらったがな。

そつえば自己紹介をしていないな。おれはテッド・ポーン。この店の店員で未来の店長候補。今は若店長で親父のコンラッド・ポーンの下で修行中の身だ。ここの実質的な店長は祖父のマシュー・ポーンで50年この店で商売をしている。一応は隠居を自称しているが、毎日店の隅で親父の商売を監視していて批評を親父に与えている。親父は未だに祖父に頭が上がらない。若い頃はトレジャーハンターもしていたから真贋鑑定においてこの店で敵うものはいない。

密かに文化庁からも真贋鑑定を依頼されるほどだった。だからこそポーン・ブラザーズは如何わしき一番なのに大通りに店を構えていられるのだ。

説明はこんなものだ。大体分かってもらえたと思う。

この店の従業員は四人。あとはアルバイトの従姉妹のフランがいる。15歳の生意気な小娘だ。小遣い稼ぎのためにたまたま店番をやっている。こいつがこの店一番のトラブルメーカーだ。ちなみに二番はおれだが。

つい一昨日もフランはトラブルを持ち込みやった。

夕立ちが帝都に雷鳴と雨を連れてきた。その日は暇な一日だったので早々に閉店しようとしてフランが準備していた時だった。フード付きマントで雨を防いで大通りを歩いてきた男が店に入ってきた。

すっかりずぶ濡れのマントから雫がぼたぼたと床に落ちていた。

男はフードを取りカウンターにまっすぐやって来た、らしい。この時店内にはフランしかいなかったのだ。

その時おれも店番だったのだが、暇過ぎて店をフランにまかせて隣のカフェでサボっていたから責められないのだが。おれはとなりのカフェ「陽気な淑女」のウェイトレスのエリーにぞっこんだった。暇があればエリーを口説きに通っていた。おかげで親父にカフェ出入り禁止例が出ているが、目を盗んで通っていた。その割にはまだデートに一度も誘えていなかった。20連敗中だ。

フランはイケメン好きである。アイドル的なイケメンが、である。今は少女に人気の演劇俳優のクラウドや大衆歌謡士のメイソンがお気に入りらしい。要はみんながチャホヤしているものを自分もチャホヤしたいお年頃なのだ。

フードを取ったその男の顔が最近人気急上昇の少年歌謡集団の「アイドルグループスターチャイルド 星的美少年」の一人に似ていたらしい。

クール担当のデニスだったか？そんな名前のやつだった。

そのデニス似の男の顔色は青ざめ唇は紫色で目が泳いでいたらしい。明らかに怯えているようだった。

イケメン好きのフランもさすがに初見は引いたらしい。

「これを、買って欲しい……」

男はマントの中からそれを差し出した。

フランが見てもそれが珍しい物であるのは間違いない。魔法マジック術器エクトの一種らしいが、その形状が特殊だった。

まずそれは棒状だった。持つと軽いが素材は金属のように硬かった。表面には白色の塗装がされ何箇所かに宝石が埋め込まれていた。魔石だ。魔力を増幅したり、属性を変換したり、指向性を持たせたりする。魔石の種類と数で魔法術器の能力が決まると言っている。

その棒の効果は、もう言うまい。おれはそのせいでひどい目に合わされたのだ。

後のフランの分析によると、使用者の外見上の形体を強制的に変更する魔法を発生する術式らしい。

おせえよ。もうおれはエリーにまで大恥をかけた後だよ。

フランがその魔法術器の扱いに困り、思念伝達水晶体コミュニケーションターで親父に連絡しようとした時におれは店に帰ってきたのだ。カウンターに近寄っていったおれはずぬ濡れの男と、フランを交互に見ながらカウンターの上的棒状のそれを見つけた。

「お、これは？」

思わずおれはそれに触れてしまったのだ。だがそれだけでは魔法術器は発動しない。この魔法術器の発動には二つの要因が必要だった。拳銃から発射される弾丸と発射するためのトリガーという役割のものだ。

まずおれ（男性またはオス）が触れることでトリガーは発射体制となるが、弾丸が込められなければ発射できないで発動しない。

その時おれはさっきまでちょっとかいを出していたエリーの事を思い浮かべていた。それがもう一つの発動要因だ。つまりこれが弾丸。これで銃弾は弾倉に装填された。そして発動。

ちなみにこれには安全装置はない。要因が揃えばいやおうなく発動し止められなかった。

おれは眩い桃色の光りに包まれた。あれ、何かヤバい気がするが、もう遅いのだろうな。いつものやつちまった、だ。

「ああ、やってしまった」

男は感情のこもらない棒な口調で言った。男は当然こうなることを知っていたのだ。だから今更驚く必要性はなかったからである。

「あ。やつちやった」これはフラン。こいつも全く感情のこもらない口調だが、おれに全く興味がないせいだった。

一番驚いたのは、忘れ物を届けに来たエリーだった。

「モルダ。あ、あなた、その姿……」

エリーは思わずおれが忘れてきた計算盤を思わず落としてしまった。

「え？」

おれが変身した自分自身に気づくのは数十秒後だった。

何とおれはエリーが着ているひらひらしたミニスカートの給仕服ウエイトレス姿に変身していたのだ。

どつりで足元がすーすーするわけだ。

というか、なんじゃこりゃ！

フランは腹を抱えて笑い出し床を転げまわっていた。

客の男は戸惑っている。この魔法術器の正体を隠しておきたかったらしい。隠しておきたかったのはその使用目的の方だったが。

エリーは呆れ返って小さく肩をすくめてから店を出て行った。あ、エリーさん。呆れないでくださいよ。

これはおれの意志じゃないんですから。事故なんですよ。これは事故。趣味じゃないんですよ。おれは変態じゃないですからね。分かっていますよね。エリーさん。

「み、みんな、おれを見捨てないでくれよ……」

おれは一刻も早くこの無様な姿を戻したかった。もしこの状況で客が入ってきたら俺はさらに恥を上塗りするしかなかったからだ。

数分後、男が元に戻す方法を教えてくれた。リバーズ機能が付けられていたのだ。

「つまりこれは、この客の趣味の魔法術器だったわけだな」

一時間後、親父が駆けつけてきた。もうその頃には事態は收拾していた。おれは元に戻り、フランの告げ口でサボっていたのがバレてこつてり絞られた。不幸だ、おれ。

客の男について、驚くべき事実が発覚した。こいつは本物のスター・チャイルドのデニスだったのだ。

しかしこいつの性癖を知ったフランは、サインを貰うのも忘れてシヨックを受けていた。

端的に言えば女装趣味だ。女になりたいわけではなく、ヒラヒラしたフリルとかついた女性の服を着たかつたらしい。しかも街角で見かけた美人のファツションを再現していたのだ。美形な自分の方がもっと似合うのだと証明したかつたらしい。こいつはかなりのナルシストのようだった。

だがその趣味を他のメンバーに知られて処分に困りここに持ち込んできたのだ。魔法術器は簡単に処分できない。予測不能の事故を避けるためである。そのため魔石の処分には魔法ギルドの専門職人の許可が必要だった。手っ取り早い処分方法はここのような店に持ち込み第三者の手に委ねることである。痕跡さえ残さなければ売り手の個人情報も店が漏らすことはない。そういう信頼関係があるからこそ様々な物品を持ち込まれるのだ。

結局その品は客の納得いく価格で買い取られ、出て行った。

こつという趣味の品は欲しい人間にはどんな価格でも欲しいものだ。親父はそういう人々とのルートも持っていた。かなり言い値で売れそうに嬉しそうだ。

おれは、もうこりこりだ。魔法具には関わらないようにしよう。フランに任せておけばいいさ。

フランは親父から小遣いをもらいこつちも嬉しそうだ。まあ、おれは何も言うことはない。

こつとして今日もポーン・ブラザーズの一日は終わる。

今度はおれが親父から小遣いが貰えるようなお宝を手にしてやる

わ。

あとエリーには誤解をとおかないとな。やれやれ。

(後書き)

二作目です。今回も習作のつもりですので拙い表現も有りますが  
軽にお読み頂ければと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8147r/>

---

ポーン・ブラザーズ

2011年3月23日22時25分発行